

「がちよう番の娘」

「それはいったいどういうわけだ」

年とった王さまは、がちよう番のむすめとのあいだにどんなことがあったか、話すように命じました。キュルトヒエンがいました。

「朝、がちようの群れを追って、町の大きな暗い門を通ると、壁に馬の首が打ちつけてあって、それにむかってあのむすめはいうんです。

『フアラダよ、フアラダ、あなた、そこにいるのね』
すると、馬の首が答えるんです。

『ああ、お姫さま。お出かけですね

あなたの母上がこれをお知りになったら

心は、はりさけてしまわれるでしょう』って」

キュルトヒエンはほかにも、野原でぼうしが風にとばされて追いかけるしなければならなかったことなどをすっかり話しました。

『語るためのグリム童話5』小澤俊夫監訳／小峰書店

がちよう番の娘の行動を、キュルトヒエンが王さまにつげるといいう形で、言葉（会話）で詳細にくりかえしています。娘のフアラダへの語りかけの言葉は、そっくりそのままです。

「がちよう番の娘」

けれども、年とった王さまはあきらめず、なんとかしてがちよう番のむすめにしやべらせようと思い、こういいました。

「わしに話せないにしても、あのストーブになら話してもよからう」

「ええ、それならいたします」と、むすめは答えました。

王さまは部屋から出ていきました。がちよう番のむすめはストーブの中に入り、心のなかのありったけをうちあげました。

「わたしは、王子さまにとつぐべき王女でした。けれども旅のとちゅうで、腰元に服をとりかえさせられ、そのうえ、けっしてひとにいわないと、誓わされました。お城にまいりましてから、馬のフアラダも殺されました。わたしは、ただひとりの話し相手として、フアラダの首を門の壁にかけてもらい、ことばをかわしていたのです」

『語るためのグリム童話5』小澤俊夫監訳／小峰書店

旅に出てからの人生を、打ち明け話でくりかえしています。

「おどるがいこつ」

そこで七兵衛は、こんどは村へかえって金もうけをしてやろうと、がいこつをかついで村へもどっていきました。

「がいこつのおどり、がいこつのおどり。やれ、おもしろや、がいこつのおどり」

七兵衛がふれ歩くと、村じゅうの人たちがあつまってきました。するととつぜん、がいこつが大きな声でしゃべりはじめました。

「おれは、一年まえに、七兵衛に殺された六兵衛だ。一本橋から谷へつきおとされて殺された。七兵衛はなまけものであそんでばかりいたので、みやげを買う金もなく、おれが買ってやったのに、おれを殺して金も荷物もとってしまった」

これをきいた村の人たちは、かんかんにおこって、「この悪党め、おまえは、そういうわるいやつだったのか」と、七兵衛をさんざんたたき、役人にひきわたしましたとさ。

『日本の昔話1』小澤俊夫再話／福音館書店

骸骨になった六兵衛が、七兵衛の悪事をみんなの前で話します。復讐です。